

令和3年度第1学期終業式式辞（放送）

おはようございます。穎明館生の皆さん、令和3年度第1学期終業の日を迎えました。放送ではありますが、穎明館の生徒全員にメッセージを送れることを嬉しく思います。

令和3年度第1学期も、新型コロナウイルス感染拡大による緊急事態宣言の影響を受け、また大変な不自由、我慢を強いられることになりました。中学宿泊体験学習が延期になったり、クラブ活動を十分に行えなかったり、残念な思いをした人も多かったことと思います。皆さんが十分な活動を行えていないことに、私も心苦しさを感じています。それでも「学びを止めない、感染しない、させない。誰かの、何かのせいにはしない」といった呼びかけに対して、しっかりと応えている生徒の皆さんに、まずは「ありがとう」と感謝申し上げたい。厳しい状況は続きます。油断することなく、感染防止対策、健康管理に努めてください。

さて、今日は穎明館生の皆さんと一緒に、「後悔」をキーワードに考えてみたいと思います。数年前に漫画にもなって話題を呼んだ、吉野源三郎の名著『君たちはどう生きるか』を私が初めて読んだのは、小学校5年生の時でした。以来、幾度となく読み返し、多くの示唆を受けましたが、一番印象に残っているのは、「後悔」についてです。

主人公、15歳の少年、本田潤一、通称「コペル君」は、暴力をふるう上級生に立ち向かおうと友人たちと約束しておきながら、暴力に怖気づき、友人を守ることができませんでした。コペル君は、その後悔で死んでしまいたいと思うほど、悩み、苦しみます。そんなコペル君に、おじさんはこう伝えました。

「僕たちが、悔恨の思いに打たれるというのは、自分はそうでなく行動することもできたのに——、と考えるからだ。それだけの能力があったのに——、と考えるからだ。正しい理性の声に従って行動するだけの力が、もし僕たちにないのだったら、何で悔恨の苦しみなんか味わうことがあろう。

自分の過ちを認めることはつらい。しかし過ちをつらく感じるということの中に、人間の立派さもあるんだ。

人間である限り、過ちは誰にだってある。そして、良心がしびれてしまわない以上、過ちを犯したという意識は、僕たちに苦しい思いをなめさせずにはいない。

しかし——僕たちは、自分で自分を決定する力をもっている。だから、誤りから立ち直ることもできるのだ」。

コペル君は、さまざまな日常の経験を積みながら、成長し、大人になろうとします。自立した人間として、立派な人になろうと努めます。コペル君の姿を通して見えてくるのは、自立した立派な人間とは、失敗や後悔と向き合い、もう一度立ち上がろうとする人間です。そして失敗や後悔があっても、自分の意志で自分の生きる道を決めていく人間です。『君たちはどう生きるか』では、コペル君が、そしておじさんが、人生をどう生きるかを自分で考え続けること、抱き続けること、放棄しないということを繰り返し、語りかけてきます。

思えば私自身、後悔を重ねながら生きてきました。中学・高校時代には、思い出だけで苦痛に感じるような後悔もあります。もちろん、教師としての後悔もあります。しかし、そういった後悔があるからこそ、自分自身の成長も、今もあるようにも思えます。

今日は第1学期の終業式。穎明館生の皆さん、皆さんの1学期はどうでしたか。勉強への取り組み、学業成績、生活態度、友人関係、家庭生活等々、後悔はありませんか。「後悔先に立たず」と言いますが、「人生に後悔はつきもの」でもあります。悩みながら、苦しみながら、成長して行ってほしい。自立への道を歩んで行ってほしい。私はそう切に願っています。節目の今日、いつもそばで寄り添い、見守ってくれている担任をはじめ、先生方からの言葉もしっかりと受け止め、自分自身を見つめ直し、今後活かしてください。

それから明日からの夏休み、本を読みましょう。新しい出会いを求めて行動しましょう。そのときは一冊の本、小さな出会いかもしれませんが。それでも若い時に読んだ一冊の本や人との出会いは、あとから振り返ると、かけがえのない輝きを放っている場合もあります。それは後から気付きます。皆さんの人生がそれぞれいい味を出していくためには、本との出会い、人との出会いが必要です。本を読もう。行動しよう。将来、後悔しないためにも……。

ところで第35期の6年生、受験生の皆さん、皆さんは自分の可能性を信じて勉強し尽くし、受験生として後悔のない夏を送ってください。若い頃、勉強せずに後悔している大人はいますが、勉強して後悔した大人はいません。まずは大学受験、後悔しないように……。

穎明館の全生徒が、それぞれの夏休みを健康で有意義に過ごすことを心から願っています。それではまた、2学期始業式で元気に会いましょう。

以上、令和3年度穎明館中学高等学校第1学期終業式式辞と致します。